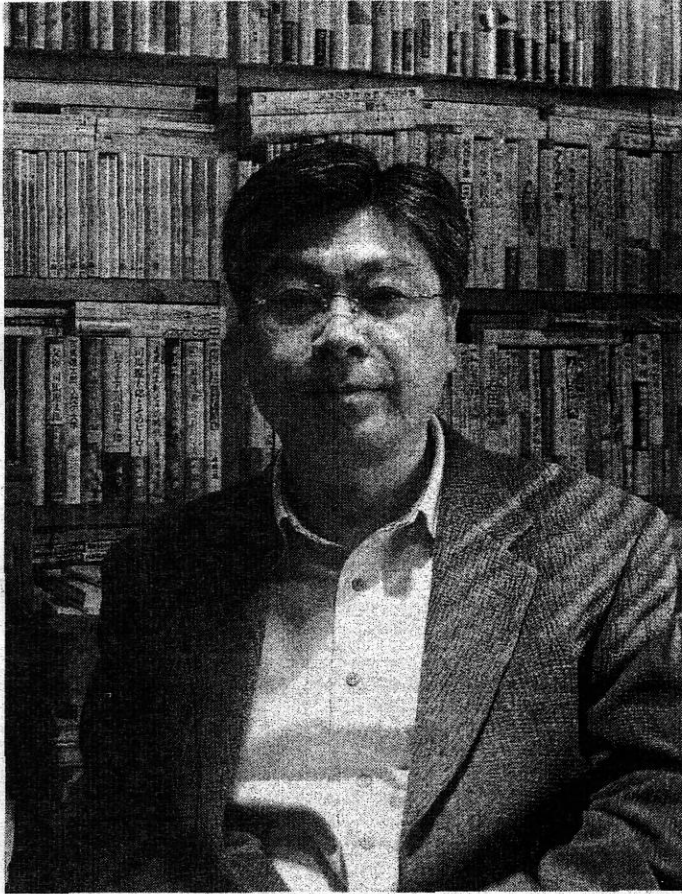


おおさかを創る

OWL仕事図書室主宰

四木信さん(53)

羽曳野市羽曳が丘西



人間にとって仕事とは、いったい何なのだろう。この疑問に十八歳のときからこだわり続けてきた。平成五年、同じ悩みをもつ人の一助になれと、羽曳野市の自宅の一室に、仕事や職業についての専門書などを取りそろえた「OWL(アウル)仕事図書室」を開設。本棚に約三千冊が並ぶ様子は圧巻である。

「OWLとは「オリジナル・ワーキング・ライフ」の略。この言葉に「主体的仕事人生」との意味を込めている。「高校三年生の夏休みごろから、生まれて初めて将来の生き方、職業、仕事について悩み始めたのです。二十代前半まで、あなたにとって仕事とは何か、なぜ働くのかと周囲の人たちに質問

しました。大半の人たちは、家族のためと答えました。が、結局、納得できる回答は得られませんでした。そして、本に答えを求めた。年間約百冊。二十歳のとき、仕事の問題は自分の問題であると同じに日本社会の問題だと思ふようになり、やがて「社会の課題」であると感じるようになった。以来、「人間とは価値あるテーマをもつて生きるもの」と、仕事を考えるようになった。三十年以上にもわたる思索の歴史そのもの

「仕事とは」悩める人の一助に

OWL仕事図書室 「主体的仕事人生」について参考になる図書・資料を集めており、閲覧や貸し出しができる。事前電話予約制。同図書室は羽曳野市羽曳が丘西3の6の21、四木さん方内(電話・ファクス0729・56・7484)。研究会への参加申し込みも同図書室へ。参加費一般1000円。未成年者半額。ホームページのアドレスは<http://homepage3.nifty.com/OWL/>

「研究会は仕事や生き方について考える場であると同時に、悩んでいる人がヒントを得られる場にした。肉親や職場の同僚など親しい人と仕事について話をすると愚痴がおわってしまうことが多いですが、研究会では初対面の人と話をすること

「研究は仕事や生き方について考える場であると同時に、悩んでいる人がヒントを得られる場にした。肉親や職場の同僚など親しい人と仕事について話をすると愚痴がおわってしまうことが多いですが、研究会では初対面の人と話をすること

「研究は仕事や生き方について考える場であると同時に、悩んでいる人がヒントを得られる場にした。肉親や職場の同僚など親しい人と仕事について話をすると愚痴がおわってしまうことが多いですが、研究会では初対面の人と話をすること

(青木勝洋)